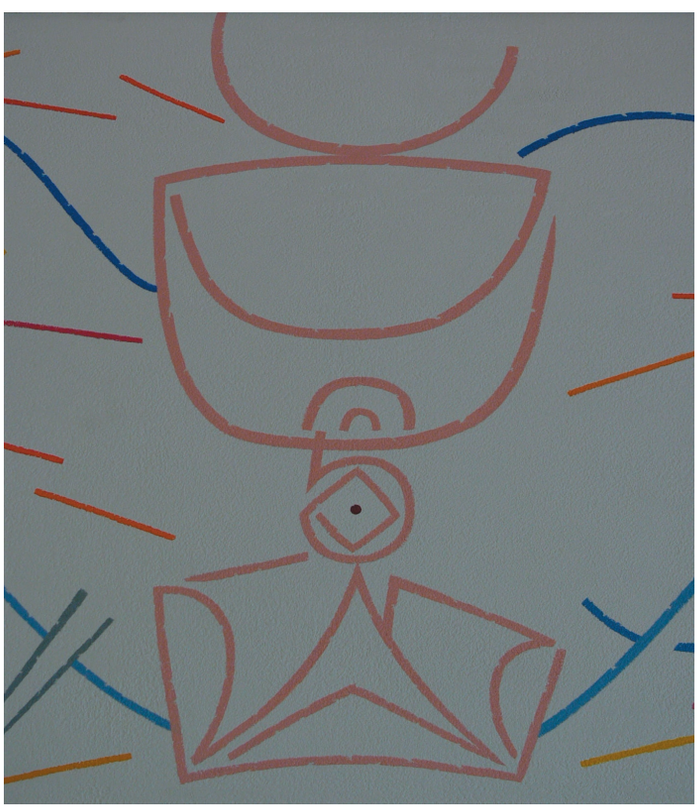
2005.11.27 司祭のてがみ No. 26
創立 50 周年記念号
行橋カトリック教会・豊津巡回教会　主任司祭：ミカエル山元眞

肌色の聖体…

１１月１５日に始まった聖堂の後の壁画は１７日にはほとんど完成していた。ただ最後に壁の中央に大きく描く「聖杯とパン」の色が決まっていなかった。九十九氏は色のことが気になりながらも眠りについた。

１８日未明３時に起こされる。「原点に戻れ」という声が聞こえた気がした。１９８０年にミラノの聖アンブロジオ教会で見た聖杯とパン…。それは大理石に刻まれたレリーフであった。その色はベージュ。すぐに「肌色」と「人体」という二つの言葉がつづいて浮かんだ。なぜ、ベージュなのだろうか。その意味するところがわからなかった…それから朝までずっと眠りにつくことができなかった。



８時。迎えに来た山元神父に「今日、最後に塗る『聖杯とパン』はベージュと思う…」と言った。「ベージュ」という言葉に神父は反応を示さなかった。なぜベージュなのか…。続いて九十九氏が言った「『ベージュ』は『肌』でしょ。『人体』でしょ…。」神父は叫ぶように言った「それだ！」。「肌色に間違いない。なぜ気づかなかったんだろう。」九十九氏は眼を丸くしてキョトンとしている…。

《主イエスはすべての人の救いのため受難に向かわれた夜、弟子たちと最後の食事をともにし、パンを取り、賛美の祈りをささげ、割って弟子に与えて仰せになった。「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしのからだである。」食事の終わりに、同じように杯を取り、感謝の祈りをささげ、弟子に与えて仰せになった。「皆、これを受けて飲みなさい。これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて罪のゆるしとなる、新しい永遠の契約の血である。これをわたしの記念として行いなさい。」》（ミサの中で唱えられるパンとぶどう酒の聖別の言葉：いわゆる最後の晩さんの出来事は新約聖書のマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ福音書に記されている）。

九十九氏も山元神父もまわりの人たちも、結局は、物質的な「聖杯（カリス）とパン」に捕らわれていた。だから、だれ一人として「肉」や「血」の色には気づかなかった。神の子は「人」となったのに…。聖杯の中央の点は当然のように「血の色」に決まった。

「聖体」を現す色は「肌色」と「血の色」に決められた。必然の色だった。

〒824-0006 行橋市門樋町８－５／TEL.0930-22-0805／FAX.22-0816／http://www.yukuhasi.catholic.ne.jp/